



No.76 2005. 7

株よかネット

NETWORK

美しいまちづくりは地域に繁栄をもたらす
 ——柳川景観シンポジウム顛末記—— 2
 「豊かな環境・景観づくりと観光産業」シンポジウム報告
 九州の地域づくり先駆者三人に会う
 ——柳川交流サロン・オブションツアー——
 色 ——科学と芸術の出会い—— ロレアル賞ワークショップ2005 7
 宇宙・生命・自然の世界
 ——河口洋一郎氏によるCGアートをみる——
 マーブルペーパーの不思議な世界
 ——三浦永年氏によるワークショップと体験記——
 花の色は、レストランの広告戦略
 ——多田多恵子氏の植物たちのしたたかな受粉戦略の話——
 きれいな“赤色”を求める日本と欧州2000年の旅
 ——下山進氏の吉野ヶ里・浮世絵・シャネルの口紅までの三題噺——
 話のネタは日頃の思いと自慢の一品
 第13回 よかネットパーティー 報告 12
 皆様から寄せられた「よかネット」への御意見、近況などの紹介 13

見・聞・食
 中世から近世初頭までの城郭遺構を今も伝える角牟礼城跡
 ～国指定史跡記念現地説明会に参加して～ 15

まち歩き
 第3回福岡・博多まちあそびの会
 昔、ここに蒸気機関車が走っていたー旧筑肥線を辿るー 17

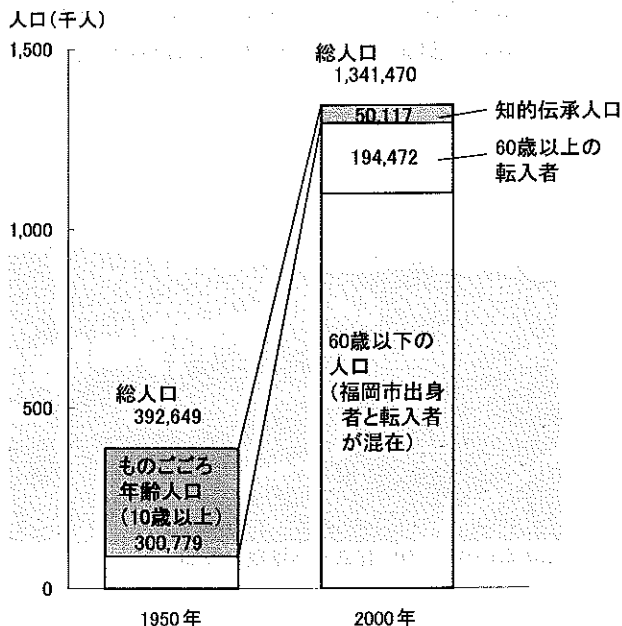
近況
 平凡常識教語録④
 仕事が消える——パート雇用への社会システム転換期 19

本・BOOKS
 市民ベンチャーNPOの底力 20

●福岡市の60年後の知的伝承人口は5万人!?

60年前の福岡・博多のまちの風景を直接知っている人はどれくらいいるのだろうか。そんな疑問からこの計算を始めた。ものごころがつく年齢を5歳と考へて、1945年から2005年までの60年間でどれだけ知的伝承人間が減っているかを見ようとしたが、なかなかデータがないので1950年と2000年のデータのみをみている。戦前の福岡・博多のまちの風景という地域情報を保持している人は約5万人で、福岡市の総人口の3.7%しかいない。知的情報の受け継ぎはますます困難になっている。

〈福岡市人口に占める知的伝承人口の割合〉



①ものごころ年齢人口(1950年ベースで計算)

・1950年の福岡市10歳以上人口 300,779人※
 ※福岡市総人口1950年392,649人と1947年人口325,554人を比べると約7万人増えているので、少し母数としては問題があるが、データがないため1950年で試算

②ものごころ人口の生存率(全国)

・1950年の10歳以上人口 62,472千人
 ・2000年の60歳以上人口 29,741千人
 $29,741 / 62,472 * 100 = 47.6\%$

③福岡市のものごころ年齢人口生存者数

・①×② $300,779 * 0.476 = 143,192$ 人

④転出せずに市内で暮らしていた人率(a)

・毎回ものごころ年齢人口が転出※ 0.83^{10}
 ・ものごころ年齢人口がまったく転出せず 0.83
 ・したがって、(a) = $0.155 \sim 0.83$ という可能性
 ・乗数の中間(5乗:0.3939、6乗:0.3269)の値0.35をとる
 ※福岡市からの転出率(5年ごと)は毎回概ね17%

⑤知的伝承人口

・③×④ $143,192 * 0.35 = 50,117$ 人

美しいまちづくりは地域に繁栄をもたらす

柳川景観シンポジウム顛末記

糸乗 貞喜、本田 正明、原 啓介

“儲かる”という言葉に反発があると思ったが、結果は大盛会だった

このシンポジウムは、5月21・22日に開催され、盛会裡に終わった。この催しは、生前の広松さん（柳川堀割の再生をやったときのキーマンで、市役所職員であった）との約束が下敷きとしてあった。その元々のつながりは12-3年前のNIRA(総合研究開発機構)の研究チームである。そのときのメンバーである立花さん（柳川市観光協会会長、旧柳川城主別邸・料亭旅館御花の社長）、駄田井久留米大学教授、私、それに陰の出席者である広松さんの共同企画といってもいい。この10年余の間に、広松さんとは「柳川市は何で食っていくのか」、「環境整備は経済と結びついてこそ継続できる」、「まちづくりは“続いてナンボ”だ」、「柳川の川下り舟は“続くまちづくり”の全国の見本だ」、「儲かって雇用が確保されてこそ環境維持ができる」、「なんとかこのことを、柳川をケーススタディにして実証的に説明したい」などといい続けてきた。

立花柳川観光協会々長に主催を引き受けていただいて、多くの地元の方々に支えていただいた。そして、伊藤滋NPO日本都市計画家協会々長をはじめとする、東京・九州各地の方々、あるいは国

・県・柳川市の方々に参加をいただき、内容的にも充実したシンポジウムになり、“全国区の見本のひとつ”になった気がする。

柳川とはそもそもなんだ——川のないクリークのまち？

今回のもう一つのネライは、柳川の魅力探しであった。21日に、東京・九州各地・地元の40余人のひと々が、魅力探しのプレ・イベントを持った。

柳川の掘り割りの水はどこから来ているのか、有明海と柳川はどのように関わっているのか、柳川の土地はどのように形成されたのか、などが分かるルートをたどって、思い思いの感想を話し合った。では、水が流れる構造を見るために、JR瀬高駅から出発した。矢部川からの分水地点以降、沖端川に入り 塩塚川への分水地点を通りさらに二ツ川(これが柳川城内の掘り割りの水となる)に分水し それ以降の有明海の近くまでが有明海漁業の内港となっている。

当日は、干潮時を選んで堤防をたどったので、水のない沖端川に延々と漁船が係留されていた。聞くところによると、この地域の漁船は1500隻ぐらいあり、うち柳川市だけで約700隻(その70%ぐらいが海苔漁船)ということであった。水のない川に係留されて林立する数百の漁船は、この土地と有明海の関係を目の当たりにするもので、壮観であった。



水のないクリークに林立する無数の漁船

シンポジウムのチラシ



干潟のスケールに圧倒される参加者

有明海に出ると、見渡す限り干潟になっていた。しばらくすると潮が戻ってきて、上げ潮の水際には小魚がいるらしく、鷺が数羽それを啄んでいた。誰かが「ここは月の引力が見える場所だなあ」とキザなことを言った。まさに沖端川の河口は、有明海の構造が見える場所である。

有明海沿岸から戻る道は、数百年にわたって進められた干拓の跡を逆にたどることだった。干拓による田圃の造成は、かなり頑丈な海岸堤防をつくってはさらに沖へ埋め立てをのぼすということの繰り返しである。このことがほぼゼロメートルの土地で繰り返されてきたことになる。この後城内に帰って、川下り舟で楽しんだ。

(いとりのり さだよし)

「豊かな環境・景観づくりと観光産業」
シンポジウム報告

5月22日には、「豊かな環境・景観づくりと観光産業」というタイトルでシンポジウムを開催したので、その概要を紹介する。

伊藤滋氏基調講演(NPO法人日本都市計画家協会会長)

6月1日に景観法が全面施行される。例えば、柳川市が景観地区を指定し、その地区内で建物を建てたり、改築するときは、市長の許可が必要になる。今までの法律では、「美しい」、「街並みを整える」といった内容は、ほとんど入っておらず、個別の建物についての確認を行うものだった。これではまちがなかなか良くならない。

東京では大分の臼杵のまちがいいと評判になっている。臼杵のまちをみんなで管理しながら、昔



上げ潮がヒタヒタと押し寄せると、その水際に小魚がいて、鷺がねらっていた。鷺の手前は干潟

からの由緒正しいまちをつくっていくという誇りを持っている。まちに住んでもらうには、年配の方が誇りを持って住めるようにすることがとても大事。景観法でまちの形をつくっても、魂を入れなければならない。そのためには、年配の方々が大事になってくる。柳川も、マンションなど作らず、水辺に似合った雰囲気のみちが広がり、年配の方々を歴史を感じながら暮らせるまちになればいい。歴史都市のチャンピオンとして、堀割の町を維持できればいいと思っている。

美しいまちを作ることが景観法の狙いだが、戦後にできた小汚いまちを排除する市民運動をしてもらうことが必要。「街路樹がきたない」「屋根がない」「電柱・電線がみにくい」といった皆さんが常識的に考えていることは正しい。本当に正しいと思うことについて、死ぬまでラッパを吹き続けたいと思っている。

続くシンポジウムでは、パネリストの方々から、柳川への思いを聞いた

<立花民雄氏 柳川市観光協会会長>

柳川は堀割が残ったおかげで、江戸時代からの町割りも残っており、寛政時代の地図が今も使える。ここにすっぽり景観法を被せられるのではない。昔のまちを壊すようなまちづくりではなく、都市の歴史、文化性を活かしたまちづくりを行っていく必要がある。目立つ広告看板なども、どうするか考えないといけない。

今は個人客がメインになっているので、味ツアーや、工芸ツアー、歴史文化ツアーなど、様々なメニューの開発や、新幹線やインターチェンジから柳川のまちをつなぐような二次交通も考えなければならぬと思う。



伊藤滋先生

< 松石めい子氏 柳川水の会会長 >

昔は、堀の水が生活用水に使われていたため、洗濯や炊事のために利用する時間を定め、夜は水を使わないという不文律があった。柳川の歴史を知ると、自分たちの暮らしを守るためにきちんとルールを作ってきたまちだということが分かる。

堀は柳川の風土、地形、歴史の中で作り上げられた。堀によっていろいろな文化が育った。“水郷のまち”とはいうが、水の有り余ったまちではなく、ない水を工夫して使ってきたまちである。

昔からの堀との付き合い方を覚えている人がたくさんいる間に、その知識を残し積み上げ、全世界に発信できるようなまちになってほしいと思う。

< 駄田井正氏 久留米大学文化経済学部教授 >

NPO法人の筑後川流域連携倶楽部を立ち上げ、活動している。流域全体をテーマパークとして捉え、各地区が連携しながら相乗効果をねらうという、筑後川まるごとリバーパーク構想に取り組んでいる。

柳川の難点は、宿泊客が少ないこと。久留米から船で筑後川を下り、大川で手づくり木工を体験し、柳川に来る。そして、柳川で川下りをした後、宿泊する。また、有明海の潮干狩りを楽しんだ後、柳川に来るというように、筑後川流域全体で連携していけばいいと思う。

< 藤原和彦氏 九州地方整備局建政部都市調整官 >

景観法が改正され、県・政令市・中核市以外の市町村でも、景観行政団体になれるようになった。景観行政団体になると、市町村長は景観計画を策定し、景観計画区域を指定できる。建築物のデザインや色彩に規制をかけられる等、様々な権限を持つことになる。



パネリストの方々

九州の中では、佐賀市が屋外広告物法をうまく活用し、まちなかをきれいにするという取組を始めている。熊本の山鹿市では老人会が中心となり、八千代座を活かしたまちづくり運動をしている。

< 吉田信博氏 福岡県都市計画課課長 >

福岡県では、筑後川周辺で、筑後田園都市構想を進めている。その基本理念として、「ちっごの景観協定」を作成していきたい。各地区でテーマ毎に協定をつくり、連携する中で、柳川では「水郷田園の景観」というテーマが考えられる。柳川は、まちづくりへの意識レベルが高いまちなので、他の地区をリードしていく地区だと考えている。

また、体験型の観光が着目を浴びている。堀割の水抜きを子どもなどにやらせると、おもしろい。以前の汚かった堀を残しておいていただき、みんなで清掃すると、その苦労が身にしみて分かるのではないかな。

< 蒲池康晴氏 柳川市建設経済部部長 >

今年の3月に柳川市、大和町、三橋町が合併して新柳川市ができた。その将来像では「生きがいと活力に満ち、自然と共生する住みよいまち」を目指している。

柳川市の施策の中で、水憲法という堀割を守り育てる条例がある。今後、水憲法に魂を入れていかなければならない。柳川が持つ歴史文化遺産を利用することによって癒しの空間を作り出し、全国の中でモデル的なまちに育て上げる必要がある。

< 伊達美德氏 NPO法人日本都市計画家協会常務理事事務局長 >

豊かな景観・環境を作ろうと考えてきたから、世の中は歪んだのではないかな。ごく当たり前の景観、ごく当たり前の環境を守ればいい。昔の普通

の姿に戻すことが、美しい姿に戻すことだと思う。

観光産業という言葉よりも、産業自体を観光化する、「産業観光」という言葉がふさわしい。例えば、海苔を売るだけでなく、作っているところを見せ、参加してもらおう。学校教育で海苔をつくれれば、地域の後継者は育ち、地域の産業にとっても良い。柳川は、生活が、観光の中にしっかりと根付いており、素晴らしいと思う。

シンポジウム後半は、柳川の自慢大会になったパネリストの話の後、柳川の“いいところ”“感動したこと”“柳川土産”などについて、話し合った。会場からも柳川の自慢話が次々と挙がった。

- ・ 麦秋や、干上がった船の数は、九州にしかない。
- ・ 柳川のまちは、「えべっさん」など、小さな神様をいろいろなところに祀ってある。柳川の神様は、雨風を被らないように祠に入っている。
- ・ 柳川の人は優しい。水を大事に使ってきたから優しいのではないだろうか。
- ・ 一番素晴らしいのは、人。柳川人の心にはもてなしの心がある。30数年前に移ってきて実感した。豊かな環境を作っていく際の重要なポイントとして、よその人に自慢していいと思う。
- ・ 柳川の堀割は、全て手掘りである。観光客の方は、弥生時代から掘ってきたというとびっくりする。柳川には、自慢することがいっぱいある。
- ・ 柳川は、そこそこの収入ですばらしい自然と共に暮らせる。
- ・ 有明海の干潟に最も感動した。ひたひたと潮が満ちてくるのを体感できる場所はそうない。
- ・ 柳川も合併して広くなったのだから、資源も川下りだけでなく、干潟のあたりも含めて、いいところ探しができる。
- ・ 「さげもん」や、「うみたけ」（有明海の珍珠）もいとおみやげになる。うみたけを焼いてかじると、泥の香りがして干潟を思い出す。

シンポジウム終了時間が来て、あちこちで話が盛り上がり、柳川の自慢大会は尽きなかった。

そんな様子を見て、柳川は住んでいる人が自分のまちを誇りにしているのだなと思った。そして、それがまた堀割を大事にしていくという好循環になっていると感じた。私も、まずは自分が住んでいる地域の足下を見つめ、自慢できるところを探るところから始めたい。

（はら けいすけ）

九州の地域づくり先駆者三人に会う - 柳川交流サロン・オプションツアー -

柳川景観シンポジウムの前後に、都市計画家協会の東京グループと九州グループの交流サロンも開催した。伊藤会長を囲む交流会や、豆田地区（日田市）や黒川温泉などの九州の地域づくりを見て回るという内容のオプションツアーである。

ツアーでは、“地域づくりの要”^{かなめ}となっている人に地域の土地柄や人柄、地域づくりを始めた当時の苦労や現在の問題などについて話を聞いた。また、地域の様子も実際に歩いて見てまわったので、参加者から「濃密なツアーだな」という声も聞かれた。それぞれの地域づくりについては、過去にも詳しい記事があるので、最近の状況とツアーの様子を中心に紹介する。

あるものを生かすことが中心市街地再生の原点、嶋屋の石丸さん（日田市観光協会会長）の話

柳川景観シンポジウムの前に組まれた前半オプションでは、まず小鹿田（日田市）を訪れた。英国の陶芸家バーナード・リーチが作品をつくったり、風景画を残しているように、唐臼や登り窯と生活が一体となった小鹿田の環境は、なんともゆったりとした気分になれる。窯元の人の話を聞けばと考えていたのだが、あいにく不在だったので、お茶屋で手打ちのそばをいただいたり、窯を眺めたりとのんびりと過ごした。

その後日田市の中心街に戻り、“おひな祭り”を立ち上げるなど豆田地区の町並みを活かしたまちづくりしている嶋屋の石丸さんに話を聞いた。ツアー参加者は、まちづくりに関心が高い人ばかりだったので、「ひな祭りを吉井などの周辺地域になぜ教えたのか」「後継者はいるのか」「豆田はこれから何で食べていくのか」などと質問がするどい。石丸さんも「吉井からまちづくりをしたいが商店街の協力がなかなか得られないと相談があったんです。そこで『新しいことをするにはリスクが伴うので、口でお願いしても人は動きませんよ。豆田はひな祭りで10万人もお客さんが来るようになって、意識が変わりました。吉井もやりませんか』といて始めたら、向こうは最初から12万人もお客さんが来ました」と笑いながらさらりと答えてくれた。私はライバルに手の内を明か

すのはどうか、などと考えていたので、石丸さんのおおらかさを見ていて恥ずかしい気持ちがあった。後継者も帰ってきているようで、豆田の店舗(100店舗ぐらい)の5割以上は地元の人がやっている。天領だった日田は、昔から商人が多かったのそういう土地柄も影響しているのではないかと、という話だった。ただ豆田でも、羊羹やそば饅頭といった昔からある本物の商品は売れるが、どこにもあるようなものは売れなくなっているそうで、日田にあるものを活かした商品開発が課題になっている。

大山の農家・農村をどう守っていくかが地域づくりの出発点、緒方さん(ひびきの郷総支配人)の話 柳川景観シンポジウム後の後半オプションツアーの目的地は黒川温泉である。シンポジウム後、休憩時間もなくワゴンタクシーに乗り込むという強行スケジュールだった。途中で、「ウメクリ植えてハワイに行こう」のキャッチフレーズで有名な大山町(現日田市)にある道の駅「水辺の郷おおやま」で休憩したところ、思わぬ出会いが待っていた。

施設は新しく、オープンしてまだ1年も経っていないようだ。どんなところだろうと店内をみると、偶然にも大山の地域づくりに係わっている緒方さんがいた。系乗がタクシー内で、大山の地域づくりの話をはじめたところだったので、「さっき話してたのはこの人!この人!」と、店内で突如名刺交換が始まった。15分程度の短い時間だったが、レストランで大山の現在の取り組みについて話をいただいた。

- ・「水辺の郷おおやま」はひびきの郷の関連施設として、国土交通省河川局の水辺プラザという事業で立ち上げている。大山地域内にある「木の花ガルテン」のレストランでは、下味のついていない田舎風のバイキング料理を楽しんでもらうというコンセプトだが、こちらはシェフやパティシエのいるプロの料理を出している。田舎料理だと肉料理などを好む子供達には敬遠されるため、子連れの家族が気軽に立ち寄れる施設という位置づけをしている。
- ・もともとは、大山の農家や農村をどう守っていくかというのが出発点で、施設をつくってきたのだが、株主に売店経営のプロなども入ってきているので、“お金になる”ということが重要

視される。そちらを重視すると2~3年ぐらいはいいかもしれないが、長い目で見たときに、大山がよそとどう違うのかということがきっと大事になる。会社の背骨となるような経営方針を考えないといけない時期かもしれない。

地域づくりの“思い”の受け継ぎはなかなか大変そう、後藤さん(黒川温泉新明館代表取締役)の話 黒川温泉につき、夕食と露天風呂を堪能して、各自が部屋でくつろぎはじめたころ、ひょっこりと後藤さんが現れて、最近行ってきたという北海道の話をしてくれた。中国製の土産を売っているが全然売れていないという話や、ヤブツバキは庭に植えたら活きた姿にならないが、山の雑木林の中に一本咲いているととても絵になるとアドバイスしたという話など、一つ一つが非常に興味深い。

次の日も午前中に1時間ほど話をさせていただいた。黒川温泉が元気になったことで、外に出ていた地元の若い人たちがほとんど帰ってきているのだが、よそのまちづくりの相談にいったときに「黒川の若い人はあまり勉強してませんね」と言われたり、女将さんの会で傘を千本つくったのだが、赤傘に緑の文字で「黒川温泉」と書かれたもので、黒川の雰囲気になんか合わなかったりというようなことがあるそうで、地域づくりに成功したと言われるところでも、それを継続していくのはさらに難しいようである。また、バスツアーで黒川に寄るエージェントが「黒川温泉は今年いっぱい部屋は空いておりません」というような宣伝をするので、宿泊客に影響があるという話なども出ていた。

旅館組合でもらった視察資料を見てみると、確かに宿泊者数はピークだった平成14年の397千人から、平成16年は337千人へと60千人ほど減っていた。

問題点を見つける繊細さと大胆な行動力を持っている3人

地域づくりのキーマンの話を、それぞれの現場で、3人も聞いたのは非常に恵まれたツアーだった。短い時間だったが、私が感じた3人に共通する印象は、地域づくりのヒントになるかもしれないと思ったので、いくつか挙げてみたい。

1つ目は、 に挙げている視点である。自分のこと(会社を含めて)だけでなく、地域のことも考えており、5年~10年経っても、地域性を活か

してお客さんに来てもらいたい、そのためには今何ができるだろうかということを中心に考えている。

2つ目は、 に挙げている問題点を見つける繊細さと大胆な行動力を持っているということ。

3人とも地域住民なのに、非常にクールに外からの眼で地域を観察している。やはり、よく外に出て行ったり、外部とよく接触していることが目を鍛えているのではないだろうか。そしてその問題点から地域づくりにとって欠かせない「おひな祭り」や「梅のリキュール」や「温泉手形」などの儲けるしくみを考えたり、自らお店を出したり、雑木を植えるといった行動につながっている。

最後の3つ目は に挙げた経営のバランスをずっと意識していることである。当たり前のことだが、自分の利益ばかり考える経営であれば、地域づくりはコストのかかる無駄なことにはならない。逆に奉仕の精神だけでは、地域づくりや経営が成り立たず、継続しない。その間にある“地

域が儲かり・継続すること”を常に考え、バランスを取り続けることが「地域づくりの心得」なのだと思う。

- 常に3つの視点でものごとを見ている
- ・個人（会社）だけでなく、地域というエリアで見ている
- ・5年後・10年後を見据えた経営を考えている
- ・お客のニーズを見ている
- 問題点を見つける繊細さと大胆な行動力
- ・地域の問題点を発見する（危機感を持つ）
- ・新しいことを考える（儲けるしくみの創造）
- ・最初に行動を起こす（リスクを取る）
- 地域づくりの経営バランスを考えている
- ・利己的にならず（自分の儲けに走らない）
- ・奉仕に没頭せず（報酬を度外視しない）
- ・地域が儲かり・継続することを考える

過去の記事については、連絡いただければ FAX いたします。 (ほんだ まさあき)

色 科学と芸術の出会い

ロレアル賞ワークショップ2005

糸乗 貞喜、山田 龍雄、本田 正明、雪丸 久徳

色を科学と芸術で……といってもどんな人が来てくれるんだ

去年の秋に、ロレアルアーツアンドサイエンスファンデーション代表の河本さんから、「ロレアル賞ワークショップを九州でやれないか」という話があった。私はロレアルが、フランスの高名な化粧品会社だということも知らなかった。まして、河本さんとの出会いは、筑波学研都市とか、関西学研都市などという、サイエンスシティの仕事を通してである。九州に来てからも、九州のサイエンスシティ問題などで来ていただいたりしていた。いつ会っても、会話にでる話題は多岐にわたるのが常だったが、「色と科学や芸術」について話し合ったりしたことはない。

昨年一昨年と、東京や京都で行われたロレアルワークショップをのぞいて、「面白いなあ」とは思ったが、なぜ河本さんが色に執心しているのかについて聞かずじまだった。

その程度の気分であるときに「ワークショップ

がやれないか」といわれても、状況のイメージが湧いてこない。「糸乗はもともと、人もうけ=ネットワークじゃなかったのか。色というテーマは、また別の人もうけになるぞ」などと挑発された。7~8年前に、「よかネットを、若い人に譲ろうと思う」といったときも、「そもそも糸乗なんてやつは、のたれ死ぬまで仕事をすべきではないのか」と挑発された。そのときは「もともと九州の人に返すつもりでいた。経営状況が一番いいときにタッチするのがいいと思っている」と返事をした。いずれの場合も、河本さんが私を元気づけようとしていていることはよく分かっていた。

それにしても、色というテーマで、この福岡で100~150人集まっている風景が見えてこなかったが、久しぶりに、とにかく一杯やってみようという気になった。もちろん、色についてのネットワークがあるわけではなく、「それぞれ2日とも50人以上は来ていただく」という目標を立て、ネットワークづくりから始めた。

幸運にも、それぞれ100～150人参加を得た。それにもまして会場の雰囲気よかった。かなり複雑なテーマであるにもかかわらず、ヴィジュアルなプレゼンテーションに努力していただいたためか、講師と参加者の息づかいが合い、全員が楽しんでいる空気になっていた。私はずいぶん「人もうけ」になった。

その後、多くの方々から「楽しかったし、ずいぶんハイレベルなワークショップだった」とほめていただいた。と同時に「来年も……」という注文も来ている。(いとりのり さだよし)

21日は、九州芸術工科大学（現九州大学）出身で第一回口リアル賞受賞者でもあるCGアーティストの河口洋一郎氏と、世界的なマープルペーパーの蒐集家であり、制作者でもある三浦永年氏のワークショップを行った。

22日は、花のフィールドワークをしている生態学者の多田多恵子氏と、吉備国際大学で日本古来の浮世絵版画に使われる色分析などを行っている下山進氏によるワークショップを行った。

宇宙・生命・自然の世界

河口洋一郎氏によるCGアートをみる

河口さんの生まれ故郷である種子島は私の故郷からも見晴らしがよければ海越しに見える。種子島出身の河口さんの話が聞けることがとてもうれしかった。

それに加え、学生の頃、仲間と組んでクラブイベントをやっていた頃に、VJ（音と光・映像の相乗効果をリアルタイムで構成し演出する作業を行う人）と組んでフロア演出などを考えたりす



ワークショップの様子

る機会もあり、3D映像、CGによるアートの世界にも多少興味をもっていた。

制作した作品を見て正直、この人の発想はすごいところからきている、ぶっとんでいる、と思った。解説を聞いて納得したのだが、宇宙とか自然とか生命をテーマにしているそうだ。「自然」とカラフルな色彩感覚は、種子島の大自然で育ち自然と身に付いたもので、自然から「宇宙」へのスケールの展開は、少年時代に見た宇宙センターから飛び立つロケットを見て抱いた宇宙への憧れからきているそうだ。

作品の背後には猛烈な数理を駆使してあるのだろうけど、それを感じさせない生き物のような動きや、作品の中のでてくる液体のような球体のようなものが増殖するような表現が、見ていてとても不思議だった。ちなみに、河口さんの好きな時代は、クラゲなどの原始的な生物がたくさんいたカンブリア紀、5億5000万年前（銀河系を約2回転戻す）で、アイデアや色彩感覚を高めるためにアマゾン奥地の原住民の家に泊めてもらったりして、そこから原始的な世界の色や形を会得して作品にしている。

一番興味をもった話は、未来型の伝統芸能をつくるという話であった。現実世界の人の動きをリアルタイムに作品へ反映させることができるらしく、舞台空間そのものが、中で演ずる人の動きに準じて演出されるそうだ。

3Dアートの作品を2次元のスクリーンで見るとはあっても、その作品の中にいるような感覚というのはまだ味わったことがない。私は音楽が好きなので、是非いい音と光とそれらを同時に味わってみたいところでもある。

それよりも、先人が伝えてきた伝統芸能がなく



河口さんの作品
(東京で開催された展覧会の案内八ガキより)

なるのはとても残念に思う。このまま、何もしなければ自然と消えてなくなる地域の伝統芸能を新たな切り口で蘇らせるカギを河口さんはもっておられる。ちなみに河口さんは地元主義とおっしゃっていた。九州で未来型の伝統芸能が見れる日があることを私は強く願っている。きっとこれまでにない異次元を体感できるであろうし、九州のアートシーンに刺激を与えること間違いなしです。

(ゆきまる ひさのり)

マーブルペーパーの不思議な世界

三浦永年氏によるワークショップと
体験記

三浦さんについては、パンフレットなどでマーブルペーパーでは世界の第一人者であり、ロレアル賞の賞状の制作者であるということを知っていたせいか、どんな芸術家風の人であろうかと勝手に想像していた。

私は当日のカメラ係でもあったので、早めに会場に入ると、エプロン姿でマーブルペーパーを作る容器のところで準備をしている方が三浦さんであろうということは察しがついた。三浦さんは、芸術家というより職人さんといった雰囲気であった。

会場のアクロス円形ホールに入ると、横2m、縦1m、高さ20~30cmはあろうかという容器が置かれていた。この容器の中には、マーブル模様を出すインクを垂らす溶液が入っている。さらにその真上にはカメラが据え付けられ、製作の様子を大画面で見れるようになっていた。今回のマーブルペーパーワークショップは実際に製作しながら、合間々でマーブルペーパーの歴史、製作の方法などをコト細かく説明するようなスタイルで行われた。また、大画面にインクが垂らされ、数種類の色が重なって、滲んでいく様子などが映し出され、非常にわかりやすく、かつ飽きのこない内容であった。

三浦さんはマーブルペーパー制作者であると同時に世界的なコレクターでもある。現在、16世紀から18世紀後半まで約1万点のマーブルペーパーを持っているそうだ。これは大英博物館所蔵の5倍ぐらいの量らしい。5,000枚ぐらいを収集したときにマーブルペーパーの本を自費出版された。



実際にマーブルペーパーを作りながら説明される三浦さん



マーブルペーパーづくりに初挑戦する河口さん

この時には日本の出版社は見向きもしなかったのに、200年以上続くイギリスの出版社が駆けつけてきて腰を抜かしたそうだ。この本が世界のスタンダードになっているとのこと。

一通り説明と実演が終了すると、三浦さんの前に報告された河口さんが進行役の人から促され、マーブルペーパーづくりに初挑戦された。

今回のワークショップでは小林康夫さん(東京大学教授)と永山国昭さん(自然科学研究機構岡崎総合バイオサイエンスセンター教授)のお二人が進行をされた。この進行が、これまで経験したシンポジウムや講演会と違い、ロレアルワークショップや講師の紹介にしても2人の丁々発止での掛け合い、アドリブ満載で進められ、会場もすっかりリラックスした雰囲気となったように感じられた。このように今回のワークショップは入場者と講師とが一体となった非常に楽しい会であった。

マーブル体験記(1)

今回のロレアル・ワークショップの目玉の一つであったマーブル体験募集があったとき、7,000円であったが、これは「安い」と思い、すぐ申し込みをした。これだけの繊細なマーブル模様を出

せて、持って帰ることができれば十分お得であると思った。

当日、自前のエプロンをし、三浦先生の指示にしたがって油性インクを糊面に垂らし、その上に色紙をそろって被せて、すぐに剥ぎ取るのである。しかし、全く想像しえない模様が紙に映し出される。このような体験は、たぶん中学校時代の美術でのエッチング（銅版版画）以来ではないだろうか。何も難しいことは考えず、ただひたすらインクを垂らし、割り箸などでかき混ぜて紙に付着させる作業の連続である。単純であるが、これが難しく、自分が思っているイメージの絵柄にはなかなかならない。

三浦先生は9割以上同じ絵柄を再現できるとおっしゃっていたが、自分でやるとこれがどうしても信じられない。三浦先生の職人技にただ感服するのみである。

めったにできない体験をさせていただいたという意味では十分堪能させてもらったのであるが、作品に関してはなんとも持って帰れるようなものには到達できなかったことが残念。

（やまだ たつお）

マーブル体験記(2)

最初は何も考えずに自由に色を使い、好きな色の紙を使ってつくっていたが、慣れてくるともっと綺麗な模様、デザインをつくりたくなるもので、妙に色や紙選び、色の落とし方に慎重になる。青色の絵の具を多めに使い、さわやかなイメージのものイメージしていたつもりが、赤い紙に写したことで紫色のダークな仕上がりになるといったようなこともあり、なかなか思い通りにはいかないが、これが思い通りになるとうれしくなる。思わずタイトルや名前を付けてしまった。また、偶然にも綺麗な模様がでたりすることもあり、デザインセンスがなくても、奇抜なものできたりする。下手でもそれなりに見えるオリジナル作品をつくれる、これもまたマーブルペーパーづくりの楽しみの一つである。

三浦さんは一年がけで、同じ模様のマーブルペーパーを8000枚ほどつくったことがあると言っていたが、実際に体験してみてその凄さがよく分かった。しかし、マーブルペーパー制作は素人でも十分楽しめるし、突き詰めればどこまでも奥深く面白い世界だと思う。（ゆきまる ひさのり）

花の色は、レストランの広告戦略

多田多恵子氏の植物たちの

したたかな受粉戦略の話

「花の生態」と「レストラン経営」という言葉から、皆さんはどのような話を想像されるだろうか。多田さんはフィールドワークを行いながら、花と虫や鳥との関係をずっと考えている生態学者である。ワークショップの最初から「花は経済的なしがらみの中で生きているんです。」と思ひしなかった切り口で話が始まった。

“経済的なしがらみ”というのは、植物が花や花粉や蜜をつくるためには相当なエネルギーの消費、つまり「コスト」が必要なので、子孫をどれだけ繁殖させられるかという「利益」を考えて、効率良く受粉をしてくれる“お客さん（虫や鳥）”を選んで、ということらしい。そこに「花の戦略・色の戦略」というものがあるそうだ。

初めのうちは、分かったような分からないような気分だったのだが、具体的な話が出てくると非常にわかりやすい。ツバキは赤い色をしているのだが、実は昆虫の多くは赤い色が見えていない。それはツバキがメジロやヒヨドリなどの鳥をお客さんとしてターゲットにしているためで、アブやハエなどの虫が蜜にたどり着くことができないような固い構造をしているとか、ベニシジミのような黄色の花は、ミツバチやハナアブといったいろんな虫たちが集まる大衆食堂、カラスウリは夜中だけオープンしている蛾のレストラン、などといった具合である。

「したたかな植物たち」（SCCbooks）という本では、きれいな写真とともに上記のような話がふ



花と虫や鳥の関係を研究している生態学者の多田さん

んだんに載っている。興味を持たれた方は、ぜひ読んでいただければと思う。(ほんだ まさあき)

きれいな“赤色”を求める

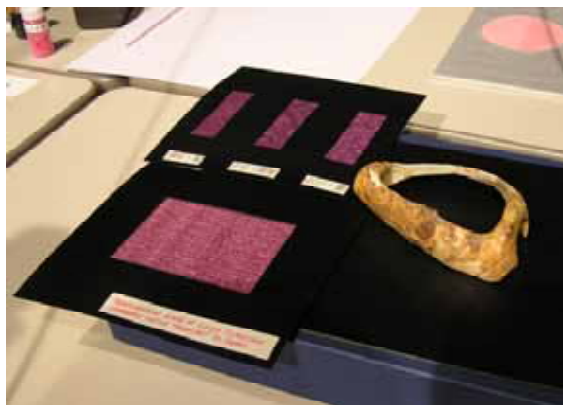
日本と欧州2000年の旅
下山進氏の吉野ヶ里・浮世絵・
シャネルの口紅までの三題噺

本来なら、全くチンプンカンプンなはずだが、いちいち実験器具を動かして「7分間待つのだぞ」といって話を進め、スクリーンに映し出して説明されたので、楽しかったし、分かった気分になれた。とにかく、アカニシという貝で染めた帝王紫(相撲の立行司は紫の装束を着ているが)とか、紅花やコチニールで染めた赤などというものについて全く知らなかった。コチニールの赤を使ってココシャネルという女性が口紅をつくったなどということも知らなかった。

東京のワークショップで見た構造色の話も面白かったが、下山先生の三次元蛍光スペクトル分析器を通した話も興味は尽きなかった。私が出たような気分になったところを紹介してみる。

吉野ヶ里遺跡にあった、カラフルな絹織物の世界と貝紫の色

話は吉野ヶ里から始まった。甕棺の中に葬られていた人が身につけていた、貝でできたブレスレットに、ほんの小さな繊維が附着していた。これを三次元蛍光スペクトル分析器で、非破壊分析をしたところ、材料と色が分かったのである。それは絹をアカニシという貝で染めた衣料だと考えられる。日本人は2000年前から染めた着物を着ていたのだ。フェニキア人も3000年前に貝紫(アカニシ)で染めた「帝王紫」を使っていた。ここで、



右が貝の腕輪で、その中ほどにある1~2cmのものが絹片。左はアカニシ貝で染めた紫の布

「ほうすごいな」とだけ思えばいいのだが、「なぜ、洋の東西で同じ紫が貴重に思われたのか」などと、思考回路が曲がってしまって困った。

よく、遺跡の模型などを見ると、掘っ立ての茅葺きの小屋の中に、寸胴型の白衣を着た人形が立っているが、ひょっとすると輝くような帝王紫をまとった人たちも居たに違いない。それ以外の色はもっと容易に染められたはずなので、カラフルな吉野ヶ里模型をつくっても良さそうに思う。

日本古来の浮世絵版画に「輝くように」使われている紅花の赤、それがヨーロッパのコチニールの赤と融合して、どんな照明の下でも美しい21世紀の口紅が生まれた

次に下山先生は、江戸時代の浮世絵に使われている紅花の赤と、現代の浮世絵の刷りインクとの違いを分析してみせる。これは肉眼で見ても、蛍光灯の下では前者の方が美しい。この紅花とヨーロッパの赤であるコチニールとを融合させて、一段と美しい(蛍光灯の下でも)赤色を作り出した。

蛍光灯の光は青と緑の光で構成されているので、青白く見えて真っ赤には見えない。ところが紅花の赤は、緑の光と青の光を吸収して、赤みの光を放出する。紅花がコチニールの弱点をカバーできないか、と考えた。十分、分らなかったが、結論らしきことを述べてみる。

「20世紀の赤はココシャネルが作った“コチニールのアカ”、21世紀の赤は吉野ヶ里や浮世絵とフランスが結合した“新ジャポニズムのアカ”」ということができそうに感じた。かいつまんで言うと、偉大なココシャネルがコチニールをベースにして、世界中の女性のためにスティック

「この浮世絵を三次元蛍光スペクトル分析器で調べてみます」と言っている下山さん





右からベニバナ、コチニール、ベニバナ+コチニールの赤の原料

状の口紅をつくった。

ところが、紅花だけだとオレンジ系に、コチニールだけだと黒くなってしまふのが、両者が融合すると赤い光に変わることを発見し、それが商品化されている。1971年にココシャネルは亡くなったが、現在のシャネルの化粧品の最高責任者(男)が、「岡山の私のところへ訪ねてきて、(シャネルが)林原生物化学研究所との共同研究、そして具体的な口紅ができあがっていく」(下山先生)というプロセスをたどって、新しい口紅を完成させた。

デンマテリアルという会社(下山祐子社長、下山先生の奥様)と、林原生物化学研究所とシャネルの共同で新しい口紅ができるのだが、その原点が考古学分野のための「文化財非破壊分析法」から出てきているというところが面白い。

本当はもっと聞いてみたいことがたくさんあった。非破壊分析からなぜ色にいったのか、紅花とコチニールの取り合わせがどんなヒントから生まれたのか、蛍光が含まれている天然の色の美しいとは、そもそも蛍光とは、などなどたくさん気になることがあった。というわけで、好奇心のある方に呼びかけます。

○下山先生とデンマテリアルを訪ねて、いろいろ話を聞いたり質問する会

- ・ついでに林原生物化学研究所も見学する
- ・さらに欲張って、どこか近くの温泉に行くとか、古代の城の石垣を見るときか狼煙台を探す

○誰か、オプションを含めて企画をやっていただけませんか。20人限定ぐらいで、関西と九州で募集しませんか。下山先生とのコンタクトは糸乗がやります。

(いとりのり さだよし)

話のネタは日頃の思いと自慢の一品

第13回 よかネットパーティー 報告

雪丸 久徳

5月14日(土)、警固神社(中央棟)で、「ひとこと・ひとあじ」でつながる人もうけ交流会「よかネットパーティー」を開催しました。

当日、所員は午前9:00に集合し、パーティーが始まる午後1:00に向けて会場の設営、盛りつけ、薫製づくりなど、ばたばたと準備にとりかかっていますが、今年も開始1時間前くらいから参加者が集まり始め、予定より20分早く乾杯する早めのスタートとなりました。

自慢のひとあじがテーブルにずらり!

このパーティーは、日頃の思いや自慢のお話、自慢の一品を皆で持ちよるパーティーです。参加者が増えるに従って、会場のあちこちで情報交換する「人の輪」ができ、またテーブルには九州や全国各地の美味しい食べ物・珍しいお酒が次々並びます。自分で作った野菜を加工してもってくる方もいます。持参品の盛りつけは所員の担当で、御飯系、つまみ系、デザート系などをタイミングをみてテーブルに出します。受けつけのピークが盛り付け係のピークでもあります。多少のつまみ食いはしましたが、味わう時間はほとんどなく、食べたい盛りの私としてはつらい時間です。よかネットの所員からは、山田の手作り薫製と糸乗の手打ち蕎麦などが振る舞われました。ちなみに山田の薫製は、当日の朝から会場の庭先に手作り薫製器を持ち込み、街中に煙といい香りを広めながらつくったもので、また糸乗の蕎麦も会場で打ったものです。よかネットから出した品を含めると、



今年もあちこちで交流が見られました



今年も諸熊さんに葉わさびをたてていただきました

トータルで100ぐらいの品数があったと思います。笑顔あり、真剣な表情あり、人もうけの輪
会場では、並んだ「ひとあじ」を囲んで隣の方と名刺交換したり、一緒に参加している人や知人を紹介し合ったり、交流の輪ができていました。例年130名ぐらいの参加があり、移動すらままならないような状況なのですが、今年は約90人といつもより少なく、しかも途中参加の人や途中で帰る方なども考えるとピーク時でも80人くらいだったので、会場にもゆとりがありました。昨年は交流する暇があまりなかったのですが、今年はテーブルの片づけや盛りつけ皿を並べている合間に何人か紹介して頂きました。

一芸披露、葉わさび漬け・飛び入り三線ライブ

漬け物をネタにしたインターネット交流会を佐賀の七山村で開催（よかネットNo.75掲載）しましたが、その時にもお世話になった諸熊さんに葉わさび漬けの実演をやっていただきました。諸熊さんとは日頃から交流が深く、一昨年も実演をしてくださったのですが、今回も実演テーブルの周りには人だかりができる大盛況ぶりでした。私も出来上がった葉わさび漬けをいただきましたが、いつもにましてツンと鼻にくる辛さがたまりませんでした。

また、パーティー参加者と、たまたま会場の隣の部屋で集まっていた「宮古郷友会」の方との繋がりで、三線ライブを披露して頂きました。「カチャアシー」というノリのいい曲に合わせて手拍子をしたり、踊ったり、指笛が鳴ったりというシーンもありました。

開始から2時間が経ち、参加者もようやく落ち着いたころ、恒例の博多一本締めでパーティーは終了しました。



急遽披露していただいた三線ライブ

パーティーを振り返ってみて、自らすすんで交流したり、仲間を紹介して回るなど積極的な人とは逆に、交流の輪を広げようという意識があまりない方もいるように感じました。よかネットパーティーは、「人もうけ」するパーティーなので、次回は遠慮なく、積極的に動いて、交流の輪を広げてもらいたいと思いました。

あたたかい心遣いに感謝

会場に来れなくても、せめて「ひとあじ」でもということで、5名の方がそれぞれ全国各地の自慢の一品をお送り下さいました。お送り頂いた皆様にお礼申し上げます。（ゆきまる ひさのり）

皆様から寄せられた「よかネット」への御意見、近況などの紹介（敬称略）

現在九州経済同友会「九州はひとつ委員会（道州制検討委員会）」委員をつとめております。市町村合併のあとの道州制についての議論、話のまとめりやすい文化観光を中心としてとりあげていただくことを希望しております。

（佐賀県小城市 村岡 安廣）

HPがすこし新しくなりました。暇な時にみて下さい。5月23日から国際協力銀行による、タイ王国食資源循環と環境教育支援に参加します。東京のNPO法人元気ネット、伊万里はちがめプラン、学術的支援として佐賀大学の参加です。

（佐賀県伊万里市 福田 俊明）

本年4月1日に「福祉用具研究開発センター」と「テクノエイドセンター」を統合し、北九州市立介護実習・普及センター「通称：福祉用具プラザ北九州」を設置いたしました。

（福岡県北九州市 松本 道博）

十数年ぶりに人事行政に戻って2年目に入りました。公務員の待遇について毎日のように批判記事が掲載され困惑しているのが実状です。しかし、改めるべき所は早急に改めようと考えています。休日はささやかな家庭菜園に精を出しています。キュウリ、トマト、オクラは今からです。ネギやサラダ菜などはプランターで簡単にできます。ぜひ挑戦してみてください。

(福岡県北九州市 丸山野 美次)
岩波書店より「呉清源とその兄弟」(定価2,520円)を刊行しました。呉家の人々を通して見た日中百年を描いた歴史ノンフィクションです。

(東京都練馬区 桐山 桂一)
多摩大学フロンティアセンター就職グループは本年4月1日付でキャリア支援センターとなりました。就職年次生だけでなく、早い段階で自我に目ざめるよう今まで以上にフェイスtoフェイスを強化していこうと思っています。

(東京都多摩市 川手 雅人)
その時私は、現れた糸乗さんを見て「宿あるの?」と聞いてしまった。3月21日、日本都市計画家協会の東京での委員会に、当然のことに欠席すると思っていた。糸乗流の被災報告は、例の陶製手榴弾が割れたことが重大事な調子で、TVを見ない私は福岡沖地震はたいしたことなかったのだと思いこんでいました。ごめんなさい。あらためてお見舞い申し上げます。神戸以来、都市の復興は施策が進みましたが、山古志や糸島のような山・漁村はどうなるでしょうか。七山村漬物文化交流ではありがとうございました。東京でお湯だ氷だと右往左往して笑われたひとりでした。いつか現地を訪ねたい。いつも興味ある硬軟両様の論を楽しんでいます。

(神奈川県横浜市 伊達 美徳)
JR 駅に「駅弁」、空港に「空弁(ソラベン)」があるように、道の駅にも「道の駅弁」があってもよい。昨年11月から、地域の食材にこだわり、より季節感を豊かに、当道の駅では14種類の道の駅弁を開発しました。マスコミでも取りあげてもらい、大変好評で、売上げの伸長に大きく貢献しています。

(福岡県豊前市 白石 道雄)
地震の生々しい記事読ませていただきました。福岡市は震源に近く、また震源が浅かったため

にP波の震動も大きかったようですね。神戸の地震ではP波の一撃でコンクリート構造物が破壊しました。地震学の常識ではP波はエネルギーが小さく、建物は壊れないとされていますが、P波による被害は今後の研究が持たれます。おそらく大陸の地震被害はこのタイプです。関東大震災や北海道地震のような海溝型地震ではこのような(P波による破壊)被害は生じません。

(大阪府高槻市 中川 要之助)
科学万博から丸20年が経過しました。今年8月には、東京とつくばを結ぶ鉄道(TXエクスプレス)が開通します。これにより、つくばは大きく変化すると思われます。これについては「ストロー現象」により、一時的につくばは悪い方向に変化するとの見方もあります。私の学校は、つくばの地にありますが、18才人口減少の中、急増しています。

(茨城県土浦市 西谷 隆義)
地震の体験報告を読みながら、10年前の事務所の状態を思い出した。(ドアが内開きの為ドアをはずすのに1時間程かかった。)当日自宅からバイクにパールやカンチなどを積んで行った事が役立った。又、翌日から手分けして設計した建物巡り。特に淡路島の北淡町で設計した住宅の無事な姿を見た時の気持ちはいまだ忘れられません。(兵庫県神戸市 上谷 重男)
震災、大変だったでしょう。今は皆さん「揺れ過敏症」に陥っておられることと懸念いたします。でもご無事で何よりです。神戸空港は来年2月16日開港と決まりました。誰かさんの横槍で建築途中の屋上に展望レストランを増設することになり、あたふたしています。行政のやることは民間には理解できません。地方分権なんぞ恐ろしくて・・・。

(兵庫県神戸市 森井 章二)
阪神大震災から10年、本箱、食器棚等が倒れ、風呂のタイルが落ち、屋根の瓦が動き、外壁のクラック等500万円程損失しましたが、この教訓から被害が少なくなるよう対策をしております。水や燃料のストック、パール、ノコギリ、スパナ等工具の購入もしました。人間の環境への横暴に大地が怒っているように思えるのです。美しい自然を保護するため、写真を撮り歩いております。(兵庫県川西市 高橋 久栄)

温泉町ふれあいセンターゆめっこランドは、幼稚園6ヶ所、保育園2ヶ所を統合した幼保子育て支援センターの3つの役割を果たす総合施設として、H14~16年で整備しH17年4月よりスタート致しました。

(兵庫県温泉町 中村 幸夫)

農業への新規参入満5年。昨年12月に結婚し、夫婦で百姓をしています。但しまだ赤字ですが、地震の被害へのお見舞いを申し上げます。余震の終息をお祈りしています。

(長崎県鹿町町 邑本 太一)

2005.5で本の紹介ありがとうございます。3部作完結編の打合せも終わり、今年中に実践編を作成します。

「行政職員が地域に出ていこう」を興味深く読みました。2004年までJICAがフィリピンの地方分権を支援するために行っていたプロジェクトでは、州政府の職員に町を割り当て、町の職員といっしょにいろいろな地域の住民活動に出かけていき、共に考えるプラットホーム作りをしていました。こんなフィリピンの地方行政の人たちに日本に来てもらい、お互いに学びあいながら、私たちのまちづくりをサポートしてもらおうような計画を作れないもんでしょうか？

(愛知県名古屋市 西川 芳昭)

白壁の町並の観光ボランティアガイドをしています。とにかく場数をふむことにしています。

(福岡県うきは市 小田 好一)

日本21世紀ビジョンが示された。人口が減っても生産性向上により一人当たりの豊かさは保ち増しうるとの考え方は異論少なく、一方で誰でも思いつく新鮮味の乏しいもの。但しその実現方策では多くの議論があるだろう。ビジョンの中でも小さく効率的な政府とか世界的に一流の文化創造力や技術力といったことを掲げ、抽象的ではあるが方策につながる将来像を示している。ところでより注目されたのは、それ自身が目指すべき姿としての文化創造国家論。内外で人、モノ、情報が行き交い、文化創造力や技術力で世界への存在感を示す、としている。人口減少必至とはいえ、一人一人が豊かな小国になるだけ、ということ回避するのはこの国にとってだけでなく世界にとっても不可欠の努力であろう。その回避の答えが文化創造国家である

ととらえたい。そしてその実現の鍵は流入する人であり、人材誘致策とマンパワーコントロールの推進を個人的に提唱したい。

(東京都豊島区 佐藤 正憲)

中世から近世初頭までの城郭遺構を
今も伝える角牟礼城跡

～国指定史跡記念現地説明会に参加して～

山田 龍雄

角牟礼城は、大分県玖珠町の森地区という城下町に隣接する標高577mの角埋山にある。

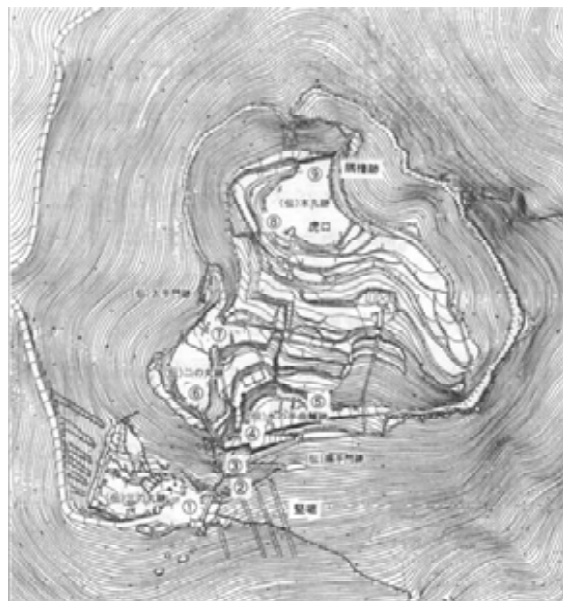
私は、平成13年度に「森地区街なみづくり計画」のお手伝いをさせていただき、この計画づくりの過程で推進母体となった「森地区街並みづくり協議会」や森地区で活動されているボランティア団体の方々とお付き合いさせていただいた。今でも街並みの進捗状況や街のにぎわいなどが気にかかり、機会があれば立ち寄ってみるところである。

去る5月8日に「角牟礼城跡」現地説明会(玖珠町教育委員会主催)のお誘いを受けたので、参加させていただいた。

落城しなかった山城伝説

角牟礼城の話は聞き及んでいたものの、実際には見ていなかった。角牟礼城は中世山城から石垣を使用した近世の城郭の遺構が残っているのが特徴である。その石垣には織田信長が築城したとき

角牟礼城跡周辺地形図





見る者を圧倒する石垣の連なり

れる安土城（日本の城郭建築のモデルとなったと言われている）の石積みに使用された^{あのうづみ}穴太積み^あがそのまま大規模に残っている。

中世から近世初頭への城の変遷がわかるこの城郭は、全国的にも珍しいということで今年3月、国の指定史跡となった。また、角牟礼城で有名な話としては、玖珠地域を大友氏が治めていた時、1587年に島津兵が6,000人の軍勢を率いて角牟礼城落としにかかったのであるが、僅か1,000人で島津兵を追い返したとのこと。これ以来「難攻不落の城」として名を高めたといわれている。また島津軍の攻撃に持ちこたえたのは、山城には珍しく中腹の(伝) 搦手門跡^{からめてもんあと}の近くの岩壁から絶えることのない清水が湧き出していたことも落城しなかった大きな要因であったといわれている。地元では「落ちたことのない城」にあやかって受験の守り神ならず、守り城として売り出せないかとの話も出ている。

(伝)：搦手門跡と大手門との位置がはっきりしないため言い伝えの場所という意味

近世城郭の原形であった穴太積みは迫力満点

当日は、昼過ぎに集合場所の森公民館に集まると総勢40～50人が集まっていた。20人程度のグループに分けてマイクロバスで山頂に向かった。

最初、三の丸跡と標された駐車場から5分も登ると高いところで高さ7m、幅100m程度はあるかという石垣が視界に飛び込んでくる。手前側の折れ曲がった形で積まれた石垣の先端部分が最も高く、その大きさに圧倒される。また大きな自然木と石垣とが一体となった風景が400年という長い年月を感じさせる。

地域の歴史解説書（「つのむれ遊観」：つのむれ会編）を紐解くと、『この“穴太積み”は、豊



展望台からの森地区の家並みと背後の山並み

後国が豊臣秀吉に没収された後の1594年に日田・玖珠に入国してきた毛利高政が築いた。当時の石工集団には「馬淵衆」と「穴太衆」の2つの集団があったらしい。安土城の築城を経て、石積みの技術を確立させていった穴太衆が生き残っていくことになる』と記されている。

「穴太衆」は、権力者の絶対的な命令とはいえ、わざわざ九州の山奥まで入り込み、残りの一生を石積みに捧げ、そのまま九州に残った者もいるかも知れないなどと想像を働かせると感慨深いものがある。

（穴太積みとは）

自然石や粗割石を使ったかなり不揃いの荒い石積み。その積み方の中で、いくつかの石をほぼ水平線上に横に並び、これから左右上下に展開されていく石積みである

中腹の展望台から眺めは絶景

石垣がある地点からやや急峻な坂道を登ったところに二の丸礎石や大手門礎石建物跡があり、ここから稜線にそって歩くこと約5分程度で展望台に到着する。この展望台は南東方向に開けており、ここから森地区の家並みや岩扇山や由布岳が一望でき、なかなかの眺望スポットである。ここから、やや単調な山道を5分ほど歩いて頂上の本丸跡に到着した。山頂はつい最近まで自然林で覆い被さっていたのであろうが、発掘作業と今日の現地説明会のためであったのか、ほとんどの木々が伐採されていた。頂上の周囲三方は急峻な傾斜地となっていることから、この地を攻めるのはかなり厳しかったと思われる。しかし、頂上に残っている遺跡は、看板がないと見失うぐらい自然の中にとけ込んでいた。

今回、駆け足ではあったが一通り説明を受けながら見て回って、人に自慢したくなる資源としては、やはり穴太積みの石垣であろうか。中世山城の本丸がある頂上も、もう少し整備（展望台や公園みたいにきれいに整備するのではなく、遺跡を見やすくし、案内板を整備する程度でよいと思う）すれば、魅力的になるのではないかと思う。

ちなみに、角埋山の自然と文化を守り続ける団体として「つのむれ会」がある。昭和56年（1981年）結成から既に20数年の活動をしている団体である。正月の新春登山に始まり、童話祭でのおとぎ登山の実施、秋のクリーン登山、遊歩道整備や参勤交代の道の草刈り、自然観察会など多様な活動をしている。角埋山の自然と城跡の文化が後世に伝わってきているものと思う。

森藩よもやま話～久留島氏の祖先は村上水軍

角牟礼城から少し話がそれるが、森藩は、徳川期になって村上水軍を祖先とする久留島氏が治めるようになったのであるが、その歴史が興味深い。

「久留島」の名は、もともとは出身地である瀬戸内海の大島と今治市との海峡に浮かぶ「来島」から来ている。初代森藩主来島康親は関ヶ原の戦いで豊臣の方に属して敗退、その後追放される。しかし、康親の義父である東軍の大功労者の福島正則のとりなし等の結果、お家取りつぶしにならず、海とは縁遠い玖珠郡の山中の領地1万4千石を与えられた。藩主の康親と家臣を含めて森地区に来たときには20～30数名であつたらしい。お家断絶にはならなかったものの、本当に断腸の思いでこの地に赴任してきた様子が想像される。その後、お家が安定してくると全国に散らばっていた家臣が戻ってきて、徐々に森藩としての礎を築いていった。しかし、来島家は城を持てなかったためか、角埋山の麓の三島公園の一角に陣屋を構えた。その後、8代通嘉のときに、天守閣を思わせる2階建ての「栖鳳楼」を造った。この建物をみると当時の藩主の天守閣への憧れみたいな思いが伝わってくる。栖鳳楼は主に三島宮の祭典や来客のおもてなしに使われていたらしい。

森地区の歴史資源と物語を活かした観光商品づくりができないか

森地区周辺には、魅力的な資源や物語がいくつもあるのだが、何故かしら地元以外の人には旨く伝わっていないようだ。また、毎年、街並み環境

整備事業で街並みはきれいになっているが、単に街並みが美しくなったからといって観光客が増えるということは期待できない。森地区の個性ある歴史遺産や物語を活かし、地元の人々のやる気と遊び感覚での観光商品づくりができないかと思っている。（やまだ たつお）

第3回福岡・博多まちあそびの会

昔、ここに蒸気機関車が走っていた
- 旧筑肥線を辿る -

愛甲 美帆

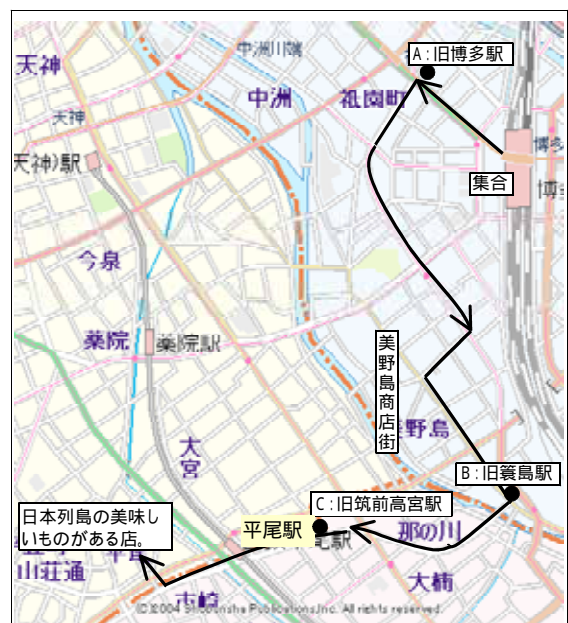
昨年11月より開始した福岡・博多のまちなかに残る歴史やエピソードなどをみて歩く、「まちあそびの会」を4月23日に実施した。

ほんの20数年前まで市内は鉄道が巡っていた

福岡市では、3月に市営地下鉄第3号線が開通し新たな公共交通網が誕生したが、ほんの20数年前までは、市内に路面電車や国鉄が巡っていた。

今回のテーマは、大正14年に開業し、昭和58年まで佐賀県伊万里市～唐津市～糸島・前原地域～福岡市南部を東西に走り博多駅まで結んでいた、旧筑肥線である。現在の筑肥線は、昭和58年に福岡市営地下鉄と相互乗り入れとなり、伊万里駅から地下鉄姪浜駅までとなっている。旧筑肥線は博多駅から姪浜駅まで6駅あり、1日で辿るのは厳しいので今回は2駅目の筑前高宮駅まで沿線の風景を楽しみながら歩いた。

まちあそびマップ





旧博多駅付近にある「鉄道発祥の地」の記念碑

参加者の顔ぶれ

参加者は、これまでの参加者や新聞記事をみて申し込みがあり、小学2年生から78歳の方まで約30名であった。休憩時に自己紹介をして参加された動機を話してもらったが、趣味で蒸気機関車や寝台特急の写真を撮っている方、昨年夏休みの自由研究で旧筑肥線を自転車で辿った少年、福岡市内に引っ越してきていろいろと知りたいたと参加された方、自分が住んでいる近くを歩くからと参加された方など様々であった。

参加者の方に教えてもらいながら歩く

<旧博多駅>

まずは、現在の博多駅を南下し昭和38年11月末まで博多駅があった付近に行った。現在一部は公園になっており、『九州鉄道発祥の地』と刻まれた黒光りの記念碑がある。碑の両側に直径170cmほどの車輪がついていたのだが、参加者の方から「蒸気機関車の3番目の車輪で1番大きいものではないか」と教えていただいた。

<住吉神社と美野島商店街散策>

次の目的地は、旧筑肥線沿いにあった住吉神社（黒田長政が元和九年（1623年）に本殿を再建した）である。その隣の明治時代の博多商人の別荘跡地に日本庭園を整備した楽水園^{はかたべい}には博多塀といわれる土塀がある。ここは、参加者の方で勤務先が近くにある方に、太閤町割により復興した際に戦国時代の焼け跡が残った焼け瓦などを壁に埋め込んだという話や現在は中でお茶も飲めることを紹介していただいた。後日、他の参加者の方から、韓国に行って博多塀と同じものを発見しましたと写真を送ってくださった。

住吉神社からは、沿線を少し外れて、美野島商



「ここが 駅で、こんなマークがあります」と皆にわかりやすく旧筑肥線を紹介してくれた少年

店街を散策した。参加者はコロツケをほおぼったり、苺を買ったりと自由に楽しんだ。

<簗島駅>

沿線に戻り1駅目があつた簗島駅跡に向かった。元駅があつた場所までは線路跡が緑道になっている。確かに、歩いてきた後ろを振り返ると道の幅とカーブが線路のようである。緑道の最後には後から駅の看板とホーム跡のような石置があるが「鉄道廃線跡を歩く」（宮脇俊三 編著、JTB発行）によると当時のものではないようだ。また、近くに住んでいる参加者の方が「多分駅はここら辺だったと思う」と50m程先の地点で言われた。

「福岡駅風土記」（弓削信夫、夕刊フクニチ新聞社編、葦書房）によると、近くに電気会社など工場があり、当時の駅はその工場などで働く人達でごった返していたそうだ。ここで、少年の出番である。昨年の自由研究で旧筑肥線を自転車で辿り作ったという地図と写真をもとに、沿線の紹介や電信柱に表示された「筑肥線通り」のマークなど現在鉄道跡を示す目印を紹介してくれた。とても分かりやすい説明に大人達は「へえー」と関心しながら聞き入った。

<筑前高宮駅>

簗島駅から今回の目的地筑前高宮駅までは、那珂川を渡って2km程である。この橋は昔鉄道が通っていたことを表す蒸気機関車と線路のデザイン、街灯は鉄道の信号がモチーフになっていて、ひっそりとしているが歩くと楽しい。その後は、当時の面影はほとんどなく、少年にマークを教えてもらいながら歩いた。

筑前高宮駅の駅跡は、当時の目印がなくはっきりしない。昭和12年に北九州鉄道から国鉄に移管

されるまでは「新柳町駅」とっていたそう。歓楽街へ向かう人も利用していた。通勤時間帯は、約200m先の西鉄平尾駅への乗り換えでごった返していたり、唐津、伊万里方面から行商のおばさん達も来ていたという。

現代の方が便利になったと思いこんでいたが、今はなき旧筑肥線の様子を知ると、住んでいるところによっては、新鮮な魚が身近に買えたり、快速もあって移動時間が短かったりと、以外にそうでない部分もあるとふと思った。

まちの変遷をみながら世代を超えた交流が生まれる参加者の方からは「福岡市外へ嫁いで、家の窓から『あの列車に乗ったら福岡市に帰れるのに』と眺めていたのが懐かしい」、「昭和37年に大阪から引っ越して来たのだけど、ここにあった駅だったのかしら。田舎だろうと思って来たけどそんなことはなくてびっくりしたんですよ」、当時の時刻表をみて「そうそう、この快速に乗って通ってたんだよ。懐かしいなあ」など、申し込みの時や歩いている間に、私が全く知らないこの鉄道があった頃の生活や旧筑肥線にまつわるエピソードを聞かせていただいた。

また、皆に説明してくれた鉄道好きの少年と記念碑の車輪の説明をしていただいた男性は、九州新幹線の一部開業により新大阪から熊本までの運行となった「寝台特急なは」について年齢を超えて話が弾んでいた。

まちの変遷を垣間みながら、参加した人がそれぞれの興味でつながったり、知っていることを皆さんに話して下さったりと世代を超えて交流した楽しい半日となった。今後は参加者から提案があった博多の職人や旧大名町界限などのテーマと一緒に考えて企画していきたいと思っている。

(あいこう みほ)

所 員 近 況

平凡常識教語録

仕事が消える パート雇用への社会システム
転換期

今まであった仕事が、日に日に消えていってしまうような気がする。それを特に感じたのは、全国都市再生まちづくり会議に関わっていて、発表テーマとしてでていることが、以前とは様変わりし



1946年旧札に証紙を貼る様子(「日本全史」より引用)

ていると感じた時である。そこへこんなメールが届いた。「市街地の改良とか整備、再生といった古来の事業系が無い……」と書かれていた。

今から60年前の昭和21年(1946)の冬、私は親父に言われて紙幣に証紙を貼っていた。新円切り替えといって、「古い紙幣はもう紙くずです」ということになったが、新しいお札に印刷が間に合わないで、小型の切手のようなものを貼って代用品にしたのである。日に日にお金と仕事が消えていって、みんなもがいていた。中流階級の内の目端の利いた人間以外は、パートになっていたのだ。預金や生命保険などは、かなりの部分が紙くずになった。資産家は売り食いをして「竹の子生活」といった。売ることがない人たちはもっと困った。

さらにその60年前頃も忙しかった。武士という商売が消えてしまったのである。

「五郎治殿御始末」(浅田次郎著、中央公論新社刊)には、車夫になった武士の話が出てくる。当時の最低の形容詞が「車夫・馬丁のたぐい」だった。「二本差し」がそれで稼ぐしか生きる道がなかった。フィクションではあるがウソではない。

「武士の家計簿」(磯田道史著、新潮新書刊)には、ドジョウを焼く士族/回船問屋に嫁ぐ武家娘/士族その後/興隆する者、没落する者……などと書かれている。明治維新は、中級以下の武士が起こしたとされている。大体の場合、運命を変える仕事は、社会の中流階級の内の気力のある人たちが核になっている。それに乗れなかった人や、資産のない人たちはパートになっていったのだ。

現在、「正社員が消えてパートになっている」などといわれているが、その経験を日本人は十分持っていることになる。ただ、60年、120年前に日本人が経験した「総パート化」はドラスティックなものだったように思う。今の日本はお金持ちだ

からそれほど気にしなくてもよいのか、それとも“国家が持っている1000兆円の負債の破壊力”は傾きだしたら凶暴性を発揮するのか、気になるところだ。

仮に、現在の10年もの国債(金利1.3%)に例をとると、市中金利が3%アップした場合には、元金のおよそ20%ぐらいが飛んでしまうことになる(100万円のお金が20万円以上消えるということ)。ゆとりのある日本人だから全員が落ち着いているのか、なれない経験だから全員が暴走を始めるのか、皆さんはどうお考えでしょうか。

(糸乗 貞喜)



「市民ベンチャー
NPOの底力」
富永一夫
中庭光彦 共著
水曜社

“NPO法人”というとなんだか無条件で信用があり、いいものなんだ、と世間(主にマスコミ)がみているように思う。

「ボランティアや奉仕活動で社会貢献しているので、寄付や補助金をください」というようなスタンスのNPOをみると、なんとなく違和感を感じてきた。NPOでも収益事業を行うことはできるし、その収益を使って、非営利事業を行うことができる。だから、行政や企業ではなかなか行えない地域サービスを提供することで、お客さんから直接お金をいただいて、それを原資として非営利事業も行うのが普通のNPOではなからうかと思ってきた。

寄付や補助金もいいのだが、それは最もコストカットされそうなお金である上、どうしてもサービスを提供する一般の人たち側よりも、お金を outcomes してくれる行政や企業側を向いてしまうのではないだろうか、という心配が私の違和感の中心にある。

NPOなどの地域活動は立ち上げることよりも、どうやって“継続していくか”の方が難しいと思う。どうやって活動資金を継続的に確保するのだが、サービスを提供する相手から直接いただく形

が一番素直で、長続きするのではないだろうか。

この本は「NPO FUSION長池」の数々の取り組みのドキュメンタリーなのだが、コーポラティブ住宅事業を行ったり、住宅の管理メンテナンスの事業などの地域サービス事業をいくつも立ち上げている。団地とコンサルタント契約まで結ぶなど、収益事業もかなり行っている。また全国都市再生モデル調査に応募して、郊外ニュータウンの生活実態を住民自らフィールドワークで調べたりもしている。

この本の筆者が書いているように「個人のちょっとしたニーズを発見し、その価値がわかる仲間たちによりサービス開発を行い、自らが利用者となり評判を高め、利用者の輪を広げていく」という姿勢が、肩に力が入りすぎなくて長続きしている秘訣ではないだろうかと思った。

(本田 正明)

--- 編集後記 ---

「よかネットパーティ」での手づくり燻製は、二日間ぐらい“手づくり”のタレに漬け込み燻製(熱燻)とするのですが、いつも調味料は目分量なので、毎年味が安定しません。今年は、よくできたと自画自賛しています。タレのベースに白ワインを使うのですが、いつもよりワイン量を抑えて、水との比率を1:1にしたのがよかったのではないかと思います。材料が肉系統の時には、もう少しワインを増しても美味しくなったのではないかと、微妙な味付けに毎年苦労しています。燻製も造り出すとなかなか奥の深いものです。(た)

よかネット No.76 2005.7

(編集・発行)

(株)よかネット

〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号
福岡パールビル8階

TEL 092-283-2121 FAX 092-283-2128

http://www.yokanet.com

mail: info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-6942-5732

東京事務所

TEL 042-501-2531

名古屋事務所

TEL 052-202-1411

(株)地域計画・名古屋